
テイルズ オブ ジ アビス 外伝 第1章

日下 時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズ オブ ジ アビス 外伝 第1章

【Nコード】

N3450Q

【作者名】

日下 時雨

【あらすじ】

エンディングからのルークとティアの物語

エンディングからのルークとティアの物語

月明かりが照らし、億千の星達が静かに見守る中、ゆっくりルークはティアの元へ歩いてゆく。

静かにティアの瞳から一滴の涙が流れ、ルークはそっと抱き締めた。

「ル、ルークなの？」

胸に顔を埋めていたティアが顔を上げ、潤んだ瞳を向ける。

「ああ、そうだよ。待たせてごめん」

そう言つて笑顔を向けるルークの胸に、ティアはまた顔を埋めた。

「ルーク！アッシュは？」

立ち尽くす仲間の中から、ナタリアが問い掛ける。

「バチカルに戻れば分かるよ。あいつシャイだから」

瞳を潤ませたナタリアが、後ろを向き走り出す。

ルークの胸に顔を埋めるティアを除く全員が、その後姿を追いつながら、ガイが口を開いた。

「おい、そっちが落ち着いたら、きつちり説明して貰うぞ！今日は貸しにしとく」

「そうですね、さすがに歳ですから私も空気は読めます」

「アニスも空気読めますから〜今度お土産期待してます〜」

ジェイドとアニスもガイに続き口を開く。そして、笑顔を一瞬ルークに向け、ナタリアが走り去った方へ歩を進めた。

ルークとティアが星空の下、2人きりになる。

潮風が髪を心地よく揺らし、静寂が2人を包み込む。

「ただいま、ティア」

背中にまわされたティアの腕に力がこもる。

「お帰り、ずっと、ずっと信じて待ってた・・・」

「／／／／／／／／」

「どうして何も言わないの？」

「い、いや、何て言っていないか・・・」

「相変わらずね」

そう言つて、ティアがルークから離れて背中を向ける。

「ねえ、アツシュも生きてるの？」

「ああ、うん、生きてる」

「ルークはもう大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、俺もアツシュも」

そう言つて、ルークはティアを後ろからそつと抱き締める。まわした腕にティアの手が添えられる。

「俺とアツシュは、ローレライによって助けられたんだ」

「どういうこと？」

「俺は音素乖離、アツシュは肉体の乖離が始まっていた。ローレライの鍵によってローレライを解放したと同時に、俺とアツシュはローレライの契約者になった。第七音素の意識集合体であるローレライは契約者となった俺とアツシュの中に入り込み、俺にはアツシュの音素を、アツシュには俺の肉体を、それぞれの第七音素を使って補い修復した。元々俺はアツシュのレプリカだし、2人とも第七音譜術士だから抵抗もなくなね。ただし、多少の時間はかかったけど」

そつとルークがティアの髪を撫でる。

「ローレライがしたのは、それぞれの音素と肉体の融合だから、それぞれの意識体はそのまま残ったんだ。そして俺とアツシュを解放してくれた時に言ったんだ」

プラットフォーム、ローレライとの融合。

円形の保護壁に守られるルークとアッシュの肉体。

ローレライが囁く。

「ルークはルークでありアッシュでもある。アッシュはアッシュであり、ルークでもある。だがそれは、音素であり、肉体の話だ。それぞれの意識体はそれぞれのままだ、想い出も、思考も、記憶も。今この時を持ってどちらもオリジナルだ。我が与えし生を受け、ローレライの力を取り込んだお前達は兄弟として、その人生を全うする事を我は望む」

「まあどっちが兄かって話で別れ間際に揉めたけど」

片手で頭を掻きながら、ルークは恥ずかしそうに呟く。

「で、どっちが兄なの？」

クスツと笑い声をあげ、ティアが聞き返す。

「知ってて聞いているんだろ？」

「さあ、それはどうかしら？どっちなの？」

「どう考えても、俺が弟なのは自分でも分かっているよ」

ティアがクスクスと笑い出す。

「ねえルーク、ずっと待っていたんだから、これくらいの意地悪いいでしょ？」

ルークは抱き締めた腕に力を込め、そつと呟く。

「ずっと逢いたかった、もうずっと一緒だよ・・・」

「ルーク、もうそろそろ起きて」

ベッドで寝ているルークにティアが声をかける。

ここは、ユリアシティ、ティアの部屋だ。

「ルーク、今日は大事な日なんだから！」

なかなかベツトから起き上がらないルークにティアが声を張り上げる。

今日は、キムラスカ・ランバルディア王国の王位継承式だ。

現国王インゴベルト6世が後見人となり、アッシュ・ルツ・キムラスカ・ランバルディアが王位を継承する。

当然女王は、ナタリア・ルツ・キムラスカ・ランバルディアだ。

「そつだ！遅れたら、あの2人に何を言われるか・・・」

そう言つて勢いよくベツトをルークは飛び出した。

「ルーク、貴方は弟として、そしてユリアシティを守る騎士団の初代首席総長として出席するんだから、もつと自覚を持つて」

口調は強いが、優しい瞳が宿っている。

「ごめん。ティアはもう準備したの？」

「私だつてテオドーロ市長の補佐官としても出席予定なんだから」

ユリアシティは、ローレライ教団より独立し、教団とは密接な関係を保ちつつ独自のスタンスを取る事になって、ティアも神託の盾騎士団を退団し、テオドーロ市長の補佐官となったのだ。

「あと1時間でノエルがアルビオールで迎えにくるわ」

「うん。新しいキムラスカの始まりだからね、すぐ準備するよ」

街中がざわめきたち、人々の笑い声がこだましている。

国民が心から祝福してるのは、街を少し歩けば自然と伝わってきた。

アッシュはキムラスカ軍の指揮官として強固な軍を作り支え、ナタ

リアは国政の総責任者として、それぞれが国を見事に支えている。

ルークはティアと共に式前の兄であるアッシュと面会していた。

ナタリアは当然として、ジェイド、アニス、ガイも友人として、それぞれの立場として。

「忘れないで下さいですの〜」
あつ忘れてた、友達としてミュウも。

この世界は、変わった。

スコアがなくなり、未来は自分の手で切り開き歩むものになった。
混乱も招いたが、それぞれの国が団結し、努力を惜しまなかった。
きつとこれからも、まだまだ努力し続けるのだろう。

けれど、もうみんな知っている。

未来はスコアで決まるのではなく、自分の手で切り開くものだ。
明日への扉は、自分で開けるんだと。

終幕

（後書き）

オリジナルと共に、大好きな二次創作もコツコツ書いていきますので、よろしくです。（o^ - ^o）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3450q/>

テイルズ オブ ジ アビス 外伝 第1章

2011年1月28日05時04分発行